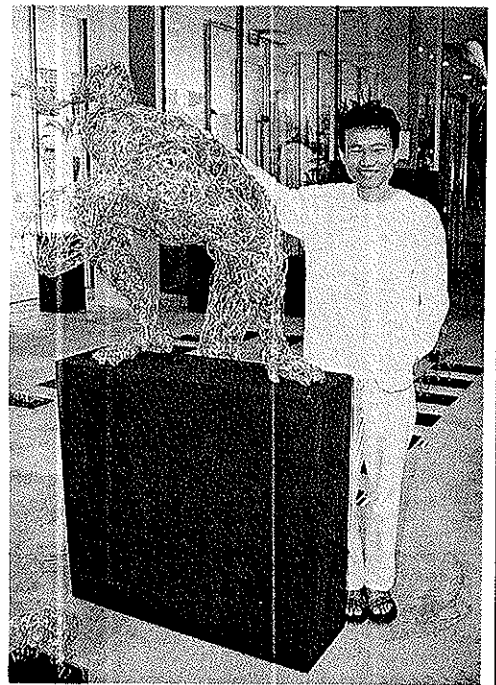


終わりのない時を一本の針金で表現 日常の一瞬をとらえるビクター・タンの「視点」

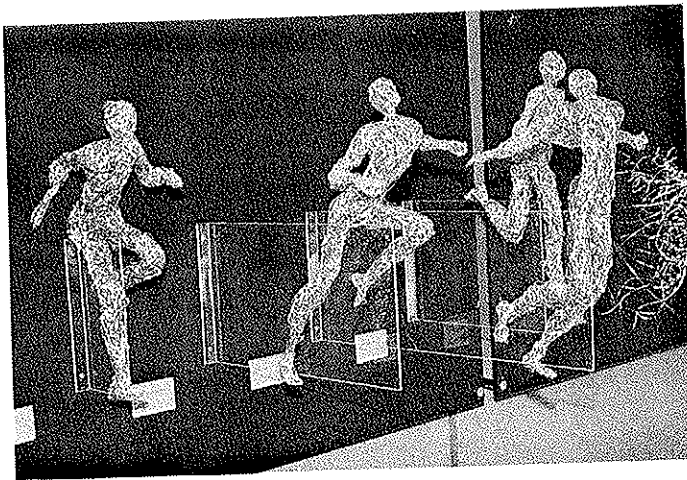
～ギャラリー・エヴァソン・ホテルで個展開催中～

赤や緑など原色の窓枠が印象的なギャラリー・エヴァソン・ホテルは、モハメド・サルタン・ロッドに近いシンガポール・リバー沿いの「ザ・キーサイド」の近くにある。

この一階、入り口の横のギャラリーを覗くと、針金で人をかたどったタンの作品が目を引く。これが、シンガポール生まれの芸術家ビクター・タン・ウィーターさん（三



ビクター・タン・ウィーターさん



ビクターさん自身が作品のモデルになっている

二)の当地で初めて開催「ピトウィー2アンド3」なのだ。視覚障害者であるビクターさんは、刷りのものをシルエツト程度にしか認識することができず、白杖か介助者の助けがないと屋外を歩くことができない。視力を失ってから専門学校で陶芸を学び、同時に針金造形を始めた。ロイヤル・メルボルン工学院で美術の学士号を受け、一昨年、シンガポール人として初めて「英連邦美術工芸賞」を受賞している。

ギャラリーに入る

と、会場の中心を囲むように並べられた小さな作品群に目が行く。これは、横たわっている人間が起きあがるまでの一瞬、一瞬を、切り取って形にしたもの。ビクターさんの「生活のすべての瞬間を大切にしたい」という想いを表現した作品だ。そして、「人生

は終わりのない長い旅のようなもの」と言うビクターさんは、作品の最後に「(二)ユー・ピギン」を題して、まだ手を加えていない針金を配置している。壁に固定されている作品以外は、すべて台の上に「置いてあるだけ」だと聞いて驚いた。人間の像は人間と同様にパランスを保って自立するように作っているのだ。また、使われている針金の量が少なく抽象的に見える作品の方が、「表現するのにも難しく、パランスを取るのも大変だけど、作っていてエキサイトする」という。

針金の作品に光が当たって、平面の床や壁に影ができる。鉛筆で書いたスケッチのように見える。実物よりも二次元的な、三次元の造形。これが、この展覧会のタイトル「ピトウィー2アンド3」の意味だ。

会場には、ビクターさんが針金で作った「ピエタ」(キリストの遺骸を抱く聖母マリア)の像と募金箱が置いてある。寄付金は、キリスト教系の福祉団体を通じて、インドネシアの恵まれない子供たちのために使われるという。仏教の影響を受け、「瞑想によって、今ここにいたことを自覚す

る」というビクターさんが、このようなチャリティに協力していることが微笑ましい。

イベント名
BETWEEN 2 AND 3
＜アーティスト＞
Victor Tan
＜場所＞
The Gallery Evason Hotel
(76 Robertson Quay)
＜料金＞
無料
＜期間＞
10月7日まで

鉄製品を満載して台湾の高雄から香港に向かっていた、シンガポール船籍の貨物船「MVデルタ62」が、九月二三日早朝、高雄の西一八五キロの海上で台風による高波を受け、沈没した。シンガポール人のポール・チャンさんを含む船員二十五人は、台湾の軍艦によって全員救助された。死者はなかった。

（星籍の貨物船）
台湾近海で沈没

員二十五人は、台湾の軍艦によって全員救助された。死者はなかった。

し二三日早朝、台風「レキマ」に襲われた。波は高さ八メートルに達したため浸水を防ぐことができず、乗組員は全員救命ボートに乗り移り、脱出した。

近くを航行していた船が救助に向かったが、高波に阻まれて作業は難航し、二人しか収容することができなかった。その後、台湾海軍の艦船が現場に到着し、残る全員を救助した。